

# 1/56の物語

日野高校3年 名谷侑紀の場合



地域とのつながりが  
新たな縁を結び  
自分を成長させてくれた

地元・日野高校と地域をつなぎ、高校の魅力アップに取り組み、県内初のコーデイネーターが誕生し、まもなく3年。その間、1年生だった生徒も今春、旅立ちの時を迎える。地域と共に歩んだ3年間。そこには、3年生56人それぞれの物語が刻まれている。“地域で人を育てる”とは何なのか。また、地域とのつながりで何を得て、どう成長したのか。その意義を語るにはまだ早いかもしれない。ただどうしても伝えたい物語がここにある。

“自分を変えたい”  
一歩を踏み出した彼女を  
地域はやさしく迎えた

彼女と出会ったのは、2年前の6月。初夏の日差しがみずみずしく降り注ぐ日野町図書館のテラスにその姿はあった。

町図書館へ職場体験に来ていたという彼女の名は、名谷侑紀。地元日南町で町民ミュージカルに出演しているというだけあり、活発で個性的な印象だった。

「職場体験などで地域に

高校演劇最高の舞台を目指して。待ち受けていた挫折と猛練習の日々

名谷侑紀が、ミュージカルと出会ったのは、小学生のころ。母親の影響で、日南町民ミュージカルに出演したことがきっかけだった。もともと自分と違う誰かを演じることが好きだった彼女にとって、ミュージカルに打ち込むまでそう時間はかからなかった。以来、町民ミュージカルに限らず、さまざまな演劇などに

出かけたことで、自分から積極的に話しかけられるようになった」と明るく話す彼女だが、中学時代はあまり積極的ではなかったという。そんな自分を変えたといふと、米子市内の高校への進学者が多い中、日野高校を選んだ。地元の高校なら、子どものころから取り組んできたミュージカルなど、自分の好きなことに打ち込めると考えたからだ。

入学してみると、1学年が約50人と少なく、生徒同士の距離はあまり感じ

も出演。活動の幅を広げていった。彼女が日野高校を選んだ理由の一つに、日野高校が演劇の強豪校ではなかったことがあげられる。自分で脚本を書くこともできる彼女にとって、演劇に対する方向性が定まっているのは窮屈に思えたのだろう。演劇部に入部した彼女は、その才能と個性を存分に発揮し、2年次に出演した西部地区高校演劇祭では、主演女優賞にも輝いた。しかし、そんな彼女も順風満帆な高

なかつたそう。日野町の印象についても、「気のいい人が多く、気持ちよくあいさつができる。それが日野町の“人柄”なのかな。うれしかった」と話す。そうやって、自分で一歩を踏み出し、環境を変えることで見えてくるものもある。“知らないうちに周りとの間に線を引いていた”と振り返る彼女は、地域との出会いで新たな可能性を見つけたのだ。そのことが後に彼女を助けることになる。

校演劇ライブを送れたわけではなかった。「先輩との関係に悩み、あまり活動できなかつた」と当時を振り返るとおり、2年生までは部活に顔を出さない日も少なくなかつたそうだ。

高校演劇祭は、演劇を志す高校生なら誰もがあこがれる「全国高等学校演劇大会」へと続く一大イベントだ。それは彼女にとっても例外ではなく、3年生になると一念発起。「先輩」を理由に、高校演劇に取り組み貴重な時間を逃してき



▲演劇部が行った校内上演会。少人数ながらも名谷本人をはじめ、各部員が生き生きと演じることができるのも日野高演劇部の魅力の一つだ

た。後悔するよりも、どうせ頑張るならみんなまで全国を目指したい」と、猛練習の日々が始まったのである。

当時の日野高校演劇部は7人。人手が足りない中で脚本や大道具・小道具の製作、そして、時には、校内で公演を行うなど、演劇漬けの毎日が待っていた。しかし、彼女の目には、焦りや不安などなく、むしろ高校演劇や高校生活を楽しく充実した自分が映っていたに違いない。そして、全国を目指す彼女たちの前に、ゆっくりだが確実に、西部地区高校演劇祭の本番が近づいていた。

地域との出会いでできた縁が彼女を救うことに

名谷の前に最大の困難と最高の出会いが訪れたのは、高校演劇祭まで2カ月を切ったある日。上演作品の脚本作りを、急きよ彼女が担当することになったのだ。しかし、なかなか題材が決まらず、焦燥感だけが募る中、かつて職場体験で訪れた町図書館で転機が訪れる。暗い顔を心配し話しかけてくれた松田暢子館長に悩みを相談すると、彼女はすぐさまある人物を紹介したのだ。

その人物とは、町内で活動している劇団、お芝居く